

表紙, 目次, 抄録, 雑纂, 漫録, 通信

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38661

明治三十六年三月十日發行

十全會雜誌

第二十六號

（非賣品）

全澤醫藥專門學校十全會

十全會雜誌第二十六號目次

○原著

○日本人ノ脊髓 (第一回報告) 醫學得業士 久保 武

○子宮纖維性筋腫ト多房性卵巢
囊腫併發症ノ一例 醫學得業士 越野義三郎

○抄錄

○副腎物質ノ治療上價值ニ就テ二三ノ實驗..... キ ユ ー ン

○神經衰弱性神經痛ニ就テ..... ジ エ ン ド ラ シ ッ ク

○水楊酸注射後死亡セル水銀中毒ノ一例..... エ、ノ イ パ ッ ハ

○「パラフヰン」ノ皮下注射ニ因ル鞍鼻ノ矯正法..... ア ウ エ

○植物組織ニ於ケル砂糖ノ顯微鏡的檢定ニ就テ..... ゼ ン フ ト

○硫酸銅紙ニヨル安母尼亞ノ檢定..... コ ッ ク ク ロ フ ト

○硫化水素ノ檢定ニ就テ..... デ、ガ ナ ッ シ ニ ー

○雜纂

○分娩後十ヶ月間胎兒頭骨片ノ腔内ニ存留セシ一例..... G・ K・ 生

○漫錄

○醫學博士木村孝藏先生の經歷..... 羽根田 信次
○木村先生去る..... 點 玄 道人

○會報

○叙任及辭令○會員動靜○新卒業生諸君の動靜○木村博士告別式及送別會
記事○宮田學士を迎ふ○本會名譽會員の推薦○金澤病院職制改正○金澤病
院各科醫長囑托○陸軍衛生部依託生徒の採用○新年の賀狀○入退會者

○通信

○北豐吉氏の通信○金子教授書翰の一節

○會告

○寄贈及交換書目○會費領收
此外廣告數件



宮ニ近ヨリ護謨管ヲ固ク結縛シ(チラトンカテーテルヲ假用ス)猶ホ血管多キ爲メ先ツスベシセルウエル氏ノ「クレムメ」ヲ以テ強ク夾撮シ太キ結紮系四條ヲ以テ主結紮ヲナシ腫物ヲ外方ニ牽キ出シ子宮ニ沿フテ一刀ノ下ニ切斷ス尙切斷面ハ二十有餘條ノ縫合絲ニテ二重結紮ス出血ナシ腹壁縫合ハ主縫合七條、副縫合六條ニシテ手術ヲ終ル時ニ零時四十五分、室溫三十一度脈搏六十、呼吸十八、安靜ナリ次ニ術後室ニ移シタル後念ノ爲メ〇、六%食鹽水七〇〇、〇グラム注射ス手術後經過ハ安靜狀態ヲ取り翌日ハ體溫三十七度八分ニ上昇セシモ三日目ヨリ常溫ニ復シ九日目ニ術後便通ナキニヨリ浣腸ヲ行フ十二日目ニ腹壁縫合ヲ拔去ス十月十日全治退院ス本腫瘍ノ肉眼的所見及顯微鏡所見等ハ次號ニ讓ル (未完)

孤 録

○副腎物質ノ治療上價值ニ就テ

一三三ノ經驗

(Therapie der Gegenwart, No. 8.)

副腎物質ガ血壓亢進作用ヲ有スル事實ヨリシテキューン

氏ガロストックノくりにつくニ於テ消化管及ヒ氣道ノ疾患ニメルク氏乾燥副腎越幾斯ヲ用キテ試驗シタルニ其成績次ノ如クナリシト即チ著者ハ該越幾斯ノ一%及五%ノ水溶液ヲ全ク無菌性トナシテ皮下ニ注射シタルニ多クハ著シキ局所の反應ヲ呈シ且ツ其治療的價值ハ半バ陰性ニシテ而カモ室挾斯性腸出血ノ一患者ニ於テハ癲癇發作ヲ來セリト云フ(考堂抄)

○神經衰弱性神經痛ニ就テ

(Deutsch. med. Wochenschr. 1902. No. 36u. 37.)

ジェンドラシック氏ニ憑レバ本症ハ他ニ亦証明シ得可キ神經衰弱症アル患者ニ見ル所ニシテ疼痛ハ其主ナル徵候ナルモ致細ニ其既往歴ヲ徵シ且精密ニ検査スルキハ神經衰弱症ノ素因及遺傳ヲ証明スルヲ得可ク又本症ニ特異ナルハ其疼痛ノ持續性ニシテ他ノ神經領域殊ニ他半側ノ體部に放散スルニ在リ此他此疼痛ニハ知覺異常ヲ伴フヲ常トシ且ツ眞正ナル神經痛ノ他覺の症候ヲ闕如ス所ノ如キハ外科的療法無効ナルヲ以テ宜シク内科的療法ヲ施行スベシト (考堂抄)

○水楊酸水銀注射後死亡セル水銀

中毒ノ一例

(Dermatolog. Zeitschrift, 1902 Augst.)

エ、ノイバッハ氏ハ身體ノ稍々衰弱セル一婦人ニ水楊酸水銀ノ普通使用量ヲ之ニ適當ノ間歇時ヲ隔テ、三回注射ヲ施シタルニ三週日ノ後ニ至リ水銀中毒症ヲ發シ終ニ死ニ

至リタル一例ヲ報告セリ即チ該患者ハ劇烈ナル下利ヲ起シ且ツ肛門ト膺トノ間ニ蔓延セル發疹ヲ來シ該發疹ハ膜葉剝脫ヲ起シ壞疽ニ陥リ患者ハ終ニ死亡セリト然レモ著者ハ此悲ム可キ經驗アルモ此不溶解性水銀ノ注射法ハ決シテ廢棄スベキ者ニ非ラズ前記一症例ノ如キハ寔ニ稀有ナル出來事ニシテ全ク患者ノ水銀ニ對スル特異素因ニ歸スベキモノナレバ醫士ハ深ク此點ニ注意スルヨリ外ナシト云ヘリ (南溪抄)

○「パラフキン」ノ皮下注射ニ因ル

鞍鼻ノ矯正法

(Wrasch, 1902. No. 34.)

アウエ氏ハ最初ゲルスニー氏ガ稱用セル鞍鼻ノ矯正法トシテ「パラフキン」ヲ皮下ニ注入スル法ヲ先ヅ家兎ニ就テ實驗シ綿密ナル觀察ヲ下シタル後更ニ人ニ就テ之ヲ試ミタリ患者ハ四十四歳ノ婦人ニシテ曾テ梅毒ノ爲メニ鞍鼻ヲ生ジタル者ナリシガ氏ハ之ニ同法ヲ試ミタルニ組織ノ反應ハ始メハ自覺的ニモ他覺的ニモ甚ダ強烈ナリシモ要

スルニ其結果ハ寔ニ満足ス可キ者ナリシト而シテ注射ハ
スタイン氏ノ注射器ニテ行ヒタルモ亦普通ノプラワッツ
氏注射器ニテモ行フヲ得ベシトナリ。(南溪抄)

○植物組織中ニ於ケル砂糖ノ顯微

鏡的檢定ニ就テ

(Pharmaceutische Centralblatt, 1902, 545.)

Seut氏ハ次ノ方法ヲ賞用ス即チ鹽酸「フエニールヒドラ
チン」溶液并ニ一分ノ醋酸ニ十分ノ倔里設林ヲ混和シタ
ル溶液ヲ應用ス試験ニ際シテハ物體硝子上ニ此兩液ヲ混
和セシモノ、各滴中ニ可檢物ノ截片ヲ投シ蓋硝子ニテ被
ヒ半時間水浴上ニ溫ムルニ截片中砂糖ヲ含有スルアレハ
既ニ染色ヲ呈スベシ茲ニ於テ截片ノ冷却スルヲ待チ顯微
鏡下ニ檢スレハ其一部分ハ組織中ニ他ノ一部分ハ組織外
ニ存在スル頗ル美麗ナル「フエニールグリコザツオン」ノ
束狀物ヲ認ムルヲ得ベシ而シテ茲ニ形成セル「フエニール
グリコザツオン」ハ倔里設林ニ溶解セザルヲ以テ亦永久
標本トシテ貯藏スルヲ得ベシト (謙中抄)

○硫酸銅紙ニヨリ安母尼亞ノ檢定

(Pharm. Centralbl. 1902, 549.)

Cockcroft氏ハ硫酸銅ノ七「プロセント」溶液ヲ浸シタル紙
片ヲ該檢定ニ際シ使用スル事ヲ賞用ス即チ可檢物中痕跡
ノ安母尼亞タリトモ存在スルアレハ其紙片ヲシテ暗藍色
ヲ呈セシムベシト (謙中抄)

○硫化水素ノ檢定ニ就テ

(Pharm. Centralbl. 1902, 573.)

Domenico Ganassini氏ハ該檢定ニ際シテ莫利貌電酸安門
一、二五「グラム」ヲ五十「グラム」ノ水ニ加ヘタルモノ及
硫酸酸加留謨二、五「グラム」ヲ四十五「グラム」ノ水ニ溶
解セシモノ、兩液ヲ賞用ス即チ其兩混和液ニ五立方「セ
ンチメートル」ノ濃鹽酸ヲ加フルニアリ其際若シ鐵ヲ含
有スル鹽酸ニアリテハ染色ヲ來スベシ其場合ニハ赤色ナ
ル溶液ノ黃綠色ニ變スルニ至ル迄少許ツ、稼酸ヲ加フル
ニアリ茲ニ得タル溶液ヲ濾紙片ニ浸シ之ヲ硫化水素ニ接
觸セシムレハ著シク紫色ヲ呈スベシ此ノ反應ハ頗ル賞用

スベキモノナリト (謹中抄)

* * * * *

雜誌

○分娩後十ヶ月間胎兒頭骨片ノ

腔内ニ存留セシ一例

G. K. 生

此一例ハ恩師小川教授嘗テ十全會講話ニ於テ演舌セラレタルモノナルガ其稀有ナルヘキヲ信スルガ故ニ今茲ニ餘白ヲ借テ敢テ報告ノ勞ヲ執ルト云爾

富山縣婦負郡野積村

農 ○ ○ ○ ○

二十七年

稟賦 患者生來健全ニシテ時々輕度ノ寒胃ニ犯サル外記載スヘキ疾病ニ罹リシコナク兄一人妹二人アリ妹一人ハ「ハクラミ」ニテ死シ父母健全祖父母ハ已ニ黃泉ノ客トナ

リ何病ナルカ知ラサルカ何レモ産後ノ疾患ニテ死去シタルニアラス

既往病ノ狀態 前後三回種痘シ前一回善感ニシテ二歳ノ時ナリ後二回ハ十二歳ノ頃ト廿一歳トノ二回ニシテ共ニ不感ナリキト云フ麻疹ハ十歳ノ頃ニ罹リ輕症ナリ花柳病ニ侵サレシコ無シ

月經ノ狀態 十七歳七月始來再來時々停滯シ順ヲ亂ダス持長日數ハ三一五日間ナリ量ハ始メ二日ハ大量ナルモ後チ一―二―三日間ハ稀簿小量各月經期間ハ身體ニ變狀ヲ來サス

妊娠ノ狀態 十八歳十二月結婚シ、初妊十九歳十月、再妊二十歳十月、三妊二十二歳十月、四妊二十四歳一月、五妊廿六歳五月、總テ五回ニ各妊娠經過間異常ナシ分娩狀態及ヒ産兒 各分娩ハ何レモ十ヶ月ニシテ産シ分娩機轉極メテ容易ナリ二十歳七月初妊男ナルモ分娩直後死亡、再妊廿一歳七月女ニシテ生後五ヶ月ニシテ死亡、三妊二十三歳七月ニシテ女ナリ三歳ニシテ死ス四妊廿四

歲十月生後七ヶ月マテ嬰兒生活ス男ナリ

第五分娩ハ明治三十五年二月六日正午頃誤テ地上ニ轉倒シタリシモ別ニ變狀ナカリシガ翌七日ニ至リテ產氣ヲ催シ陳痛起ル正午破膜シ羊水ヲ泄ラス然ルニ陳痛中止シ苦痛去リタルニヨリ就蓐シ產婆醫手ヲモ煩ハサズ放置シタルニ一二日ヲ經テ惡寒熱發ヲ來タシタルモ著ルシカラザリシガ漸次ニ病症激甚トナリ食慾進マス日ヲ逐フテ衰弱狀態ニ陷ル同月廿八日午前一時頃左右不明ナルガ一足ヲ出タス依テ午後六時產婆ヲ招キ分娩セシメントスルモ不能故ニ猶ホ一人ノ產婆ヲ招來シ協同シテ既ニ臍外ニ出タル下肢ヲ牽引シタルニ忽チ斷裂シ更ニ一足ヲ牽出シタルニ又斷裂ス其色汚穢綠色ニシテ一種ノ臭氣アリキト殘餘次テ出タサル上肢ハ體ニ附着スルモ通常ノ形態ヲ具備セス頭部ハ體ニ附着スルカ否ヤハ覺ヘス後產ハ悉皆娩出セラレ惡露ニモ異常ナカリキト云フ

產蓐ノ狀態 每產蓐中變狀ナキモ第五回分娩以來尿ハ淋漓トシテ出テ尿意ヲ催フスヲナク日々衰弱ノ度高マル

本病ノ既往症 明治三十四年二月廿八日分娩以來尿ハ不斷出ツ因テ治療ヲ乞フ(全年十一月五日當院婦人科)大便

一日一行、食思不振

當患者ハ本病ニ罹ラサル前己ニ第四回分娩ヲ經由セルモ毎ニ產婆ヲ招キシヲナク家族ニヨリテ處置セラレキ故ニ本回分娩ノ際モ二月六日破膜シ羊水ヲ泄ラシタルニ拘ハラス放置スルコト三週餘日ニ及ビ茲ニ始メテ產婆ヲ聘ス其愚ヤ實ニ及ブベカラザルナリ

現症 體格中等榮養不良貧血、胸腹部臟器ニ異常ナシ
 内外陰部ノ狀態 外陰部ハ通常ナルモ陰毛ニ尿酸鹽類結晶ヲ附着シ互ニ集束ス尿臭鼻ヲ衝キ不潔云フベカラス内診スルニ臍ノ側壁及ヒ後壁ハ粗糙ニ恰モ壁ノ表面ニ觸接スルカ如キ感アリ而シテ臍ノ前三分ノ一ト思フシキ所ニ橫徑ニ架スル肉様ノ幅半仙迷許リノモノアリ其前後ハ骨面ニ觸ル、如シ子宮臍部ハ其常態ヲ失シテ認ムヘカラス位置ニ異常ナシ臍鏡ヲ用ヒテ開臍スルニ臍ノ左右壁ニ橫架スルモノハ臍壁ナラン子宮臍部ノ存在部ニ當リテ一個

ノ孔ヲ見ル膀胱腫瘍ノ瘻孔ハ認メス依リテ後日色素液ニテ發見セントナス又膈壁ニ附着シテ粗糙面ヲナシタルモノハ濃灰白色ヲ呈シ砂粒ノ如ク觸ル、モノハ思ヘラク之レ膀胱腫瘍ノ爲メニ尿渣腔内ニ滯溜シ徐々ニ凝結シタルモノナラント先ツ局部ヲ清潔トシ沃剃「グリセリンタムボン」ヲ充填シ内服藥トシテ規那煎ヲ與ヘタリキ其後チ膀胱腫瘍ハ子宮ノ左側ニ小瘻孔ノ存スルヲ見ル

十一月廿八日小川教授ハ腔内異物殊ニ膈ノ後壁側壁ニ當リテ骨様ノ硬度ヲ有シ膈壁ニ箝在スルモノヲ除去セラレントシタルニ扁平ノ小骨片出ツ之レ曩ニ產婆カ腐敗セル胎兒ヲ牽引スルニ際シテ頭部ヲ斷裂セシメ腔内ニ殘留セシメタルモノニシテ其軟部ハ既ニ排泄シ硬骨面ニ尿沈渣堆積シタルモノナリ當時產婆ノ暴技亦驚クベキ哉

十二月三日全身麻酔ヲ行ヒ異物ヲ除去セラルニ凡ソ胎兒頭骨ノ大部出ツ此頭骨ハ可及的破壊セザル様勉メタリシモ如何セン膈壁ニ箝入シ除去シ難キト骨片菲薄ナルト鉗子ヲ以テ牽引スルニヨリテ破壊セラル骨片ハ吾カ婦人科

ニ貯藏セリ隨時觀覽ニ供セン

此患婦ノ如キ強テ奇語ヲ放タハ二月六日地上ニ轉落セルヲ誘因トシテ產機ヲ催フシ自然產ヲ遂ケサルニ先タチ胎兒沒シ三週日ヲ經テ產婆ノ手術ニ依リテ其死胎ノ大部ヲ娩シ尙十ヶ月ヲ經テ其殘留スル頭骨ノ大部ヲ出シヲ茲ニ始メテ分娩ヲ終ハリタルモト云フヘキ歟

* * * * *

漫 錄

○醫學博士木村孝藏先生の經歷

醫學科 四年生 羽根田信次 稿

維時明治卅五年十二月廿四日。一大悲報は忽焉天の一方より傳はりぬ。曰く木村先生の轉任。

噫回顧すれば先生が轡を本校に執りたること茲に十有餘年時に風雲動き。須臾にして麗麗となり。倏忽にして凄愴となり。這般の波瀾高低は消長苦悶の一大活劇。艱難に處して感はず。逆に陥りて挫けず。淳々として素懷を今日に致せる者。誠に後進の鑑となすべき所少からず。今先生が經歷を記すに當り予之を古人に開く。史は修むるに難し矣蓋

し三長を要すればなりと。然るに予が非才淺學薄識の三短を以て之を傳へんとす。自ら其大膽に驚かざらんや。幸に先輩飯森。東。川北諸先生の指教を得て此編を草す。唯恐る此文筆の拙劣。克く先生の洪徳を表はし能はざるを。

○北陸醫界の木鐸として。將た學者として。紳士として。高傑の品性磊落の氣字。今夙に萬人の推重する所夫れ先生乎。予今筆を呵して名譽ある恩師の品性と經歷を叙するに先ち。其先天的祖父の成行を記さんとす。蓋し事の成るは成るの日にあらず。遠因は己に此祖父の時代に孕みし事を知ればなり。

○先生の祖父名を意水と云ふ。鯖江藩の町人なり。頗る精勵俠任あり。貧人饑に泣かば即ち己か倉庫を開いて悉く施し。道路損すれば私費を抛つて直に繕ひ。其公事に盡し慈善に勉めたる甚だ多し。時の主君大に奇特となし。族を士族となし。參殿拜謁を許さる。微々たる一町人よりして此榮譽を荷ふ實に異例と云ふべし。

○父を立軒と名け蹈むに祖道を改めず。先生は其息にして。萬延元年十一月二日越前鯖江藩に於て呱呱の聲を揚

げぬ。知らず此時勢に生れたる先生の將來は如何。

○時勢の變遷は滔々逝て涯なく。世は浦賀の砲聲に情雲を破られ。維新の革命は延いて明治五年の廢藩置縣となり。武士は劔を捨て、商估に遷り。農は徒に故なき切捨御免を反抗する世とはなりぬ。時に先生未だ十歳に滿たぬ垂髫なりき。

○子を知る者は親に若かず。父の親友當時殿醫たりし。土屋寛之先生。長崎に遊びて。令名四海に高く。橋本。岩佐先生と並びて刀圭社會の粹と稱せられぬ。境遇の感化と自然の狀勢は終に先生をして。醫を以て天下に呼號すべく思ひ起たししめぬ。噫、後年恐るべき醫界の大星は實に此昆岡より起りしなり。

○年を経る事三。父は同藩中某醫の門を叩きて其薫陶を托しぬ。當時藩中中村一先生。全體新論等の研究講話あり。先生孜孜として家奴の業を助け。深夜竊に倉庫の裡に潜んで研鑽し。殆ど鷄鳴を聞きて蒼皇眠に就くを例となせり。あゝ桤檀は二葉より芳し。

○苦學の效果は。研究會に出で、論ずる處。明快壯麗截然として些の顧盼なし。其胸懷浩々焉たり。故に個中の白眉を以て推重せられ。名を儕輩の間に成し。往々老輩をして舌を卷かしむる事幾時。正に之蛟龍雲雨を得ずして池中に潜むの時。

○中村先生殊に其才幹を愛し。父に説くに東京游學を以てす。明治七年飄然去つて郷關を辞し東都に出づ。初め岩佐順先生の塾に入り。同年大學に入り。鳥嘯り花笑ふ明治十六年の春。醫學士の榮號を帶ぶに至れり。

○當時醫學士の數極て少し。各地より招聘に來る者幾數。然れ共先生空しく俸級の多寡に膝を屈し。槽扼の間に伍するを慨し。専ら意を斯道の研究に便なる場所を撰ばんとせり。時に石川縣金澤病院は西洋人を招き。病院成り學校の設備完きに近し。即ち進んで之に就く。然も其俸級は他の任地に比して甚だ少きなり。稜々たる風骨昂々たる意氣。這般に潜む。後日の大成必しも怪むに足らざるなり。

○先生初めて赴任する年齒漸く廿有三。噫此年少紳士。然も今校を去つて經驗の數ふべき者甚だ少く。醫士として治療醫として赤裡々の身を以て。今や任地の診療に従事し。傍ら醫學校生徒の教鞭を執らる。當時病院には今の如く分科に非らず。凡ての患者は皆己が好む所の醫に刺を通じて治療を求めしなり。言を換て云は、外科たると内科たるを問はず。己が苟も理想とせざる醫士には己の病患を委せざりしなり。噫、年少の木村醫學士。幾千の患者は其診療を乞はむが爲に。果して先生を訪れしや否や。

○赴任後己に三週日を経たる今日。驚く勿れ。帳簿に残されたる新患者。先生を慕ふて訪れたる病客。……僅に四名！。待たざれ共次の七日は來れり。待てども患者は其影を増さず。先生煩悶顧て醫員に嘆じて曰く。噫止まん哉。北陸の地。一の伯樂無きを奈如せむと。醫員苦笑して敢て語らず。

○三ヶ月は過ぎたり。四ヶ月は來れり。患者は依然一週

三名の數を超へず。生徒の臨床講義は之に順じて。一週二名に過ぎず。時に或は二名中の一人は内科に泣付て。借入れたる患者もありしとか。先生空しく連城の壁を抱きて。一の卞和あらず。瓦礫と共に磊々たり。

○先生深謀遠慮の才幹あり。一の蹉跌何かあらん。必竟病院の組織其宜きを得ざるとなし。沈思默考。決然起つて。病院大改革を知事に建白せり。要に曰く病院を分科すべしと。第一回の建白は知事の顧る處とならず。然れ共先生の自信定見曲ぐべからず。更に建白書數千言を以てす。第二回亦知事の採る處とならず。先生曰く大器晚成苟も誠實を以て事に當れば憂天も之を慙むと。即ち更に第三の建白書は熱涙を以て認められたり。知らず知事の態度如何。

○さりとて苛酷なり之は又。年少醫學士の涙になれる才幹の筆は。一度ならず二度又三度。終に空しく脚下に捨てられて。雲煙過眼。蚊に刺されたる大牛の角。徒に知事が茶吞話の種とはなりぬ。

○噫。此時此場合。先生は病院に待て共患者は來らず。望みの綱や建白書の全く切れ果てし絶体施命。百餘の生徒は。外科のクリニックの休み勝に。之は又百雀の蛙鳴蟬噪に時を費し。先生胸裡の畫策は恰も滅盡せり。陰雲月を蔽ひ。凄風花を散す。あわれ變る瀬ゝ住み習ふは初夏の若鮎のみならず。昨日迄幸運の寵兒たりし木村先生。浩嘆幾回。又手低頭默々焉。

○有爲の士は自ら信する所厚し。三度争はんと欲して三度退けられ。今や斷然職を辞するの外他に途なしと。即ち辞表を懷ゝして。知事に云つて曰く。

知事閣下よ。私は去ります。去るけれ共金澤病院の未來を。看るゝ暗黒に進み行く事を袖手傍觀する事は忍びません。日進の醫學に伴ふには是非共改革を斷行せねばなりません。閣下若し不肖の言に疑ふ所あらば。東都の名士に謀れ。他縣の病院に視よ。敢て職を去るに臨み進言します。

○已れ職を辞するに當り。尙病院の前途を慮る。何等の

誠實や。人の死せんとするや其言善し。知事も先生が餘りの熱心と誠實とに動かされて。一日東都三宅先生と謀れり。長與先生に聞けり。他縣病院に部下を奔せて其實況を視察したり。何う計らん。年少醫學士と悔りし建白書は。己に他縣の先鞭を著けたるあり。三宅長與先生は手を拍て建白書を是認せり。

○茲に局面一變して。枯木再び花を開き。青草燃え出づる先生の前途。明治十九年外科部長と云へる任命は。知事より下りぬ。此行や、俯仰天地に對して誇るゝ足る。蓋し其誠實丹心情溢れて人を動かしたる者なればなり。時、先生、左右を戒めて曰く。苟も人として誠實を忘るべからず。第一誠實。第二誠實。第三誠實を忘るべからずと。

○病院は内科。外科。眼科。産科。の四分科とはなれり。患者は豫期の如く來れり。一週三十名に達す。一日に算すれば四名内外なり。……小使が「今日は七人ありました」と告げたれば。先生の日記に特筆して記されたりしとぞ。先生が外科部長を拜命せらるゝや。友人戯れて曰

く……「お目出度う先生は下駄部長とやらを拜命なすつたろうな」あゝ先生の信用は未だ満都に迎はれざりしを見えたり。黃鶴翅を垂れて燕雀の林に遊び。蛟龍雲霧を得ずして鱖鰯の池中にあるの時。

○一日先生を訪るゝ患者あり。曰く米商柳澤某の息と云ふ。痔瘤を患へて手術を乞ふなり。先生即ち刀を執る。助手澤田信定なり。翌朝俄然患者病勢頓に改まりて鬼籍に入り。柳澤某意氣詭譎大に激し。前後を忘るゝ天生の癩癧。必竟愛子の死去は先生の爲なりとなし。猛然虎狼の蠻を學んで。煩惱の眼に暗みし怨の白刃。讐敵を呼んで先生の歸路を要す。先生火手囊砂の計に盡き。時の校丁古瀬某勲道を知る者あり。即ち命じて三尺の棍棒を持たしめ。以て歸路の前後を警衛せしむ。兇漢敢て迫るの機を得ず。

○之は又何等の暴舉や。寂寞たる暗夜を破りて。突然顯れたる黒鐵の臂。襟を捕へて看るゝ頭上に降り來る幾十の人礫。事の意外に愕く暇も。行く足早く逃げ失せた

る曲物。仰ぎ見れば瘦せたる星の影一つ。無念の思ひも溢れ出る熱涙。山の如く起ちたる外科助手澤田定信先生。憤に糾るゝ舌を震はして。心より搾り出されたる嘆聲……

……「あゝ外科醫にはなる者でない」……

○年々歳々花相似たれ共。隆替興亡の人相同しからず。時代の變遷は急湍激瀾。滔々逝て三年の秋を送りし明治十八年。先生の逆旅は順風を迎ぬ。噫一團の雲。天を蔽ひて来る。蛟龍亦池中の者に非らず。

○當時醫術未だ今日の如く進まず。茫々幾百北陸の刀圭界。嘗て上顎切除術を試みし者なく。到底不能の手術なりと信じて。敢て之を研鑽する者なく。患者も亦天運の窮る所と悟り徒に死を待つのみ。先生か慧爽明敏なる頭腦は。焉ぞ克く之を肯ぜんや。陰かに機を待てり。一日上顎骨悪性腫瘍の患者来る。先生曰く躊躇すれば輻斂の悔あらん。狐疑は事を爲すの道にあらずと。決然起ちて術を試む。患者數日にして退院經過頗る可なり。患者は其奇術に驚愕せり。醫士は其信僞を狐疑せり。満都の士

民は争ふて賞賛の聲を叫びぬ。往昔某の暴舉は空しく萬人の笑を買ひぬ。噫。病雀花を啖て飛騰の翅を搏つ。鰥魚の雨を得て喰喝の吻を潤す。先生今昔の感果して如何。○外科部長の職。榮は乃ち榮なりと雖も院長の榮に若かず。醫學校教師の職。譽は乃ち譽なりと雖も然も校長の譽に若かず。同年知事は。先生を送るに此尤も榮譽ある校長の任を以てす。時に年漸く廿有四。

○貪る事虎の如き世は。滔々擧げて射名も泥み。浮べる富を羨む人の心の之は又高風清節の木村先生。窮達を以て其宿志を空ふせず。禍福を以て其本末を誤らず。偶々校長の辞令至るや。先生敢て喜ばず。乃ち吾宿志も逆ふ者となし。快敏俊速辭して曰く。我職を此所も奉ずる。専ら學術の研究あり。今之を捨て校長とならんか。期する處の研究は恐くば其事務の執掌も暇なくして。第二とならん。之れ忍びざる所然も不幸にして時到來ずむば。節を採つて研究の爲に一死めるも亦悔なしと。言々肺腑より出てゝ語々抱負に滿つ。英雄の胸臆端倪すべか

らざるなり。

○時の學務課長。先づ就職の勸告を試みぬ。先生動かす再び衛生課長來りぬ。先生敢て動かす。豪膽斗の如く大よして。大節巍然として喬岳の如し。三度知事は來りぬ誠意説くに昭々として。病院學校の時事を論じ。大議公論校院の爲。敢て一身の利害を云々するの秋にあらざる事を告ぐ。先生の頭斷つべし。然も其志斷つがらず然りと雖も大議公論を奈如せむ。一身の研鑽を重ぜば。學校病院の現狀を奈如せむ。蓋し當時校院共に先生の敏腕を要すればなり。先生乃ち暫時の約を以て其職を奉ず。

○日進の醫學益々革新の機運に向ひ。當時北陸高等中學醫學部設立の噂あり。縣下の官民一致の熱望は。容易よ先生をして其任を去らしめず。文部大臣自ら來りて視る處あり。玆は甲乙二種の醫學校を合せて高等中學醫學部となし。先生は其主事となりぬ。(未完)

○木村先生去る 點 玄 道 人

○先生去る先生何か故に去る先生未だ去らざりし時先生

將に去らんと欲しし時先生胸裏の感多少先生にして始めて知り得べし他人の付度恐く先生を害はむ贅せざる所以なり

○先生去る先生今や幽谷より出て、喬木よ遷る縉纈たる黃鳥遂に丘隅に止らざるか

○先生去る先生既に尾山を跋て巨阪に在り先生健脚險峻何か有らむ

○先生去る先生去て北地春尙寒し借問す南中の先生夢溫きや否や

○先生去る先生去て冀北の野馬群遂に空し馬なさに非す良馬なきなり否な往年池月を産せるの地今日豈龍驤なからむや唯恐る伯樂ありやなしや

○先生去る先生校院に盡瘁する二十年所久しと謂ふ可し然り久しと謂つ可し然れとも尙久きもの之れ無きにあらず唯先生の如く久くして先生の如く遂に去る者はあらずるなり是れ殊に恨む可しとなす嗚呼校院幾多の國手 Terapeutik なかりしか抑も Prophylax なかりしか

○先生去る先生去るに臨て詳かに前任上長の功を彰し次て下僚某々の姓名を挙げ特に其績を表す曰く上長の功は顯れ易きも下僚の績は埋れ易しと眞箇に然り眞箇に然り上長たるもの斯心なくして可ならむや一將功成萬骨枯とは古來よりの恨事先生はよく枯骨をして餘榮あらしむる者と謂つへし

○先生去る先生の去る去るの日に去るにあらざるなり先生の去る遠く官遊の前にありしなり近く復歸の後にありしなり爾來先生は捲土重來の勢を以て院に校に大聲せり縣に省に疾呼せり院の新營せらるゝ校の改築せられむとする實に其反響の一なるなり世の近眼者流之を是れ辨せずして妄りに先生を議す思はさること甚しと謂ふ可し先生は去就を以て校院に盡竭するの心力を二三にする者に非るなり

○先生去る生先去て校院博士なし博士なきに非ず博士なきなり博士なきは愛むに足らず先生なき實に惜むへきなり
○先生去る先生は去るを以て去るにあらざるなり去らさ

るを以て去れるなり心事亦悲む可らずや校院にして省るなく縣省にして戒むるなくむば先生遂に去らむなり校院たるもの縣省たるもの三たび思を致して可なり

○先生去る人皆去ると言ふ人は先生在らざるを以て去れりと謂ふ是れ忘恩者のみ有象の先生は在らず而かも無形の先生は在り校に在り院に在り市に在り郡に在り將た縣に在り國に在るなり世間幾多の小「先生」勤めて以て大々「先生」となれ是れ蓋し先生の意なり抑亦先生の徳に報ゆる所以なり

○先生去る先生の風は山高く水長し山は峨々として雲際に聳む水は混々として晝夜を含めず山は千秋不動なるも水は刻々流れ去るを何如せむ歎するを休めよ吾黨の小子河川の流江海の水再び雨露となりて吾人に來らむ三たび霜雪となりて吾人に來らむ先生遂に去らざるなり

○先生去る「先生去」幾則豈道人胸中の先生を盡くすと言はむや何ろ況や先生腦裏の先生をや唯先生を叫喚する幾十百回するものは微く先生を恨めばなり大に先生を惜め

ばなり然れどもこれ豈獨り先生を惜むのみよして止らむ
や、、、、、

草色青青柳色黃 桃花歷亂李花香
春風不爲吹愁去 春日偏能惹恨長

Der kranke Trinker.
Arzt (bei der Consultation): „.....Das Biertrinken
muss ich Ihnen ganz und gar verbieten!“ —
Patient: „, Herr Doctor, Sie scheinen in schlechter
Laune zu sein — ich werde morgen wieder kom
men!“

* * *
Es gibt Menschen, die wohl altern, aber nie
reifen.

* * *
Neid ist oft Ueberschaetzung fremder Vorzüge.

* * *
* * *

會 報

○叙任及辭令

外科學教務ヲ囑託ス

(十一月二十四日、本校)

内科學及藥物學副手ヲ命ス(無給)

内科學及兒科學副手ヲ命ス(無給)

眼科學副手ヲ命ス(無給)

(十一月二十六日、本校)

依願雇ヲ解ク

(十一月十九日、本校)

賜一等給

(十一月三十日、陸軍省)

石川縣金澤病院醫員ヲ命ス

月俸拾八圓給與

(十二月八日、石川縣)

雇申付

雇申付

病理學副手ヲ命ス

解剖學副手ヲ命ス

(十二月八日、本校)

深美 貞之助

片山 良作

小岩井長四郎

伊野宮長民

岡島 敬治

村田 醇

八田 智証

森岡 惣太郎

島津長左衛門

森岡 惣太郎

島津長左衛門

任陸軍二等軍醫

陸軍三等醫正八位

神谷貞二郎

(十二月十日、內閣)

免本職補臺北衛戍病院附

臺南衛戍病院附陸軍二等軍醫

星野正齊

臺南衛戍病院附陸軍三等軍醫

關口通太郎

免本職補臺灣守備砲兵第三大隊附

(十二月十日、陸軍省)

叙從五位

正六位勳六等

櫻井小平太

(十二月十七日、宮內省)

依願內科學及兒科學副手ヲ免ス

(十二月十七日、本校)

小岩井長四郎

免本職明石乘組被仰付

吳海軍造兵廠
附海軍中軍醫

大西瀨治

(十二月十八日、海軍省)

各 通

土田久三郎
堀井吉平
越田信吉

海軍少軍醫候補生ヲ命ス

海軍少軍醫候補生

土田久三郎

海軍少軍醫候補生

堀井吉平

海軍少軍醫候補生

越田信吉

海軍醫學校學生ヲ命ス

(十二月十九日、海軍省)

二級俸下賜

金澤醫學專門學校教授醫學博士

木村孝藏

(十二月二十日、文部省)

大坂府立醫學校教諭ニ任ス

金澤醫學專門學校教授從五位勳六等醫學博士

木村孝藏

(十二月二十日、內閣)

年俸參千參百圓下賜

大坂府立醫學校教諭醫學博士

木村孝藏

(十二月二十日、大坂府)

陞叙高等官七等

金澤醫學專門學校教授正八位

石川喜直

(十二月二十三日、內閣)

九級俸下賜

金澤醫學專門學校教授

石川喜直

(十二月二十三日、文部省)

依願囑託ヲ解ク石川縣金澤病院外科第一部長囑託

木村孝藏

(十二月二十三日、石川縣)

叙從六位

正七位 高柳元六郎

叙正七位

從七位 敷波重次郎

(十二月二十四日、宮內省)

月俸金四拾圓給與

金澤病院醫員 東良平

月俸金參拾圓給與

金澤病院醫員 木下克雄

月俸金貳拾五圓給與

金澤病院醫員 林義輔

月俸金貳拾五圓給與

金澤病院醫員 越野義三郎

(十二月二十四日、石川縣)

叙從七位

正八位 武田正壽

叙從七位

正八位

大西 瀨治

藥學科副手ヲ命ス

雇 内藤 益一郎

(十二月二十五日、宮内省)

賜一級俸

海軍中軍醫

中野 才幸

陸叙高等官四等

金澤醫學專門學校教授從六位

下平 用彩

賜二級俸

海軍大軍醫

鈴木 寛之助

(十二月二十六日、海軍省)

依願眼科學副手ヲ免ス

伊野宮 長民

任金澤醫學專門學校教授

(二月二十日、内閣)

依願職務ヲ免ス

石川縣金澤病院醫員

林 義 輔

六級俸下賜

金澤醫學專門學校教授

宮田 篤郎

石川縣金澤病院醫員ヲ命ス

辻 本 辰之助

眼科學教務ヲ囑託ス

(二月二十日、文部省)

伊野宮 長民

月俸金貳拾圓給與

(一月七日、石川縣)

(二月二十六日、本校)

石川縣金澤病院醫員ヲ命ス

伊野宮 長民

依願雇ヲ解ク

(二月二十七日、本校)

雇 島津長左衛門

月俸金拾八圓給與

(二月九日、石川縣)

生徒取締ヲ命ス

(二月二日、本校)

助教授 松田 菊治

依願囑託ヲ解ク

(二月九日、本校)

教務囑託

林 義 輔

京都帝國大學醫科大學教授醫學博士

鈴木 文太郎

大坂府及滋賀奈良兵庫和歌山ノ四縣下へ出張ヲ命ス

(一月十日、京都帝國大學)

▲蓮村多男氏 特別會員たる同氏は今回紐育生命保險會

退役被仰付

(二月十二日、陸軍省)

陸軍一等軍醫

笠間 太作

社日本支社診査醫を囑託せられたり

雇申付

(二月十二日、陸軍省)

陸軍一等軍醫

笠間 太作

▲林義輔氏 特別會員たる同氏は今回金澤病院眼科醫員

雇申付

(二月十二日、陸軍省)

陸軍一等軍醫

笠間 太作

を辭し福井病院眼科部長として赴任せられたり

▲橋本喜久三氏 特別會員たる同氏は一月十五日を以て陸軍々醫學學校へ入校を命ぜられたり

▲鶴見金十郎氏 特別會員たる同氏は今般金澤醫學專門學校より醫學得業士の稱號を認許せられたり

○新卒業生諸君の動靜

昨年十一月卒業せられし醫學得業士諸君は目下頭書の職務に任事し又は開業せらる

東京醫科大學耳鼻咽喉科介補

加納 景成

金澤醫學專門學校內科學副手

鎌田 勘之助

海軍少軍醫候補生

堀井 吉平

自宅開業

丸山 六郎

見習軍醫步兵第七聯隊勤務

増田 貞吉

一年志願兵步兵第七聯隊へ入營

野嶽 利七

金澤病院婦人科醫員

八田 智証

金澤醫學專門學校生理學副手

島 誠 郁

一年志願兵步兵第三十六聯隊へ入營

宮越 常三郎

海軍少軍醫

土田 久三郎

海軍少軍醫

富山病院醫員

新潟縣古志郡長岡町伊野病院醫員

共濟生命保險會社醫(東京)

見習軍醫步兵第七聯隊

全上

鹿兒島病院醫員

一年志願兵步兵第三十五聯隊へ入營

鷺山 他三郎

見習軍醫步兵第七聯隊

清水 秀夫

一年志願兵步兵第三十六聯隊へ入營

林 政雄

金澤醫學專門學校病理學副手

森岡 惣太郎

金澤病院眼科醫員

伊野 宮長民

一年志願兵守山步兵第三十三聯隊入營

片岡 正

赤十字社病院醫員

富田 稔 醫

金澤醫學專門學校內科副手

春日 健治

止善堂病院醫員

三野 賢吉

一年志願兵步兵第三十五聯隊へ入營

横井 嘉 亟

越田 信吉

尾倉 一英

井口 正察

都築 熊造

藤 溟 謙

松村 魁

平田 一若

金澤醫學專門學校內科副手

共濟生命保險會社醫(東京)

見習軍醫步兵第七聯隊

金澤醫學專門學校皮膚及花柳病科副手

金城診療院醫員

金澤醫學專門學校皮膚及花柳病科副手

共濟生命保險會社醫(東京)

自宅開業

金澤醫學專門學校產婦人科副手

未詳

片山 良作

中元 長三郎

太田 長作

吉 住 保

佐藤 芳太郎

熊澤 清隆

井 原 悟

牧 良 一

谷 口 長松

鈴木 重吉

福岡 喜洋

高田 重忠

原田 正廣

齊藤 義雄

小山 庄治

藤原 敏夫

芳野 林翳

同

同

米澤 恭次

高田 文齊

○木村博士告別式及送別會記事

人生死別慘なりと雖とも何爲る生別の酷なるに若かんや曩きに恩師金子教授を送り今又北陸醫界の木鐸たる金澤病院外科第一部長本校教授木村博士と別れんとす、先生謹嚴にして然かも寛量博識多才敏捷活達勤勉なる生等の夙に私淑する所、今や四百の孤兒を棄て、何所に往かんとする生等心神凋落轉た紅淚潸然たらざるを得ず嗚呼悲喜哀歎の旋轉窮りなきは人生の常態乎、先生の心事を既に耳にする今日何爲れう怨言苦言の徒事をなさん況や集散離合は世の常又何う流涕幘巾婦女子の愚を學ばんや、玆に我校は先生の爲め一月十日午後一時神聖なる告別式を舉行せらる、高安校長登壇、眞率なる語調を以て先づ博士の轉任を措み該轉任の突然の出來事にあらずして數年前より博士が胸中既に斯道の爲めに貢獻する或は希望の躋りあり此の希望成効の最近方便として永住の地を棄

て可愛の學生と別る此度の轉任、博士が心裡の痛事如何、本校の爲め實に遺憾に堪へず然し驕て大々的に之を思へば斯道の爲めには却て喜ばしき報告を近き將來に得るや必せり唯別れに臨みて博士の健康を祈るこ、次て本校生徒總代小林孝一氏進み痛哭涙を呑みて左の辭を朗讀せられたり

木村先生を送る

敬慕せる木村先生往かれんとす

先生教鞭を吾校に執らるゝ茲に二十年其の高風を慕ふて箴を負ひ來り學ふもの歳々其の數を増し吾校を現時の重きに致さしめ有爲の材を出すこと千餘延ひては北陸の醫事衛生の啓發又勤められし事蹟亦少からず而て今や先生此校此地と袂を別かたんとす日々訓教を受くるの生等長く留られむを希ふや切なりと雖とも官命はもたし難し生等が胸裡離別の情に堪へざるものあり茲に先生が子弟四百一堂に會し先生の壽をなす

明治三十六年一月十日

金澤醫學專門學校學生總代

小林 孝 一 謹白

次て博士の挨拶あり式終り校庭に於て教授職員數十學生四百紀念の爲め撮影し次て學生の發起なる送別會を催す高安會長開會の辭を述べ新任副會長櫻井教授の送別の辭次て醫科四年、三年、二年、一年、藥學科三、二、一年各總代の惜別の辭あり次て木村博士の一場の演説をせられたり茲に大要を記して諸君に示さん

滿場の諸君、私の轉任辭令發表せらるゝや世間には種々風評もありました事でムります故甚だ恐縮と存じまするふ少々長き演説を致し度う存じまするが御許し下さるや如何でムりましょう、此度私が大坂府立醫學學校教諭に轉任し今や赴任の途につかんとするに際し校長閣下を始め學生諸氏は茲に此の神聖なる濟々堂に於て告別式を舉行せられ今又式後斯くも盛なる送別會を開き下さることは不肖の生涯に於て最も光榮とすることとムりまして唯々感泣の外ありませぬ之れ偏に發起人諸君の御斡旋其宜敷を

得たるは相違ありませぬが又満場諸君の無量の御厚情に據ることゝ存じまして發起人諸君及満場諸君に對し實に御禮を申し上る語はありませぬ、私が當地に赴任致したるは明治十六年五月でゐりまして在職殆んど滿二十年に達します而して抑も私の在職せる學校病院は今より三十六年前に生れまして此の三十六年間には勿論吉凶交々あまたした大患は罹り將に死な瀕したこともあり又大なる吉事もありて縣立の學校病院は國立のものと結婚して行末頼もしきものとなりましたが然し年尚ほ若し今や尙中等の程度にありて之より漸く大學に進まねばなりませぬ、學校病院の濫觴は實に明治元年に藩主前田公が卯辰山上に創めて養生所なるものを設けられ數名の醫師をして公衆の患者を治療せしめ傍ら醫生を集めて醫術を講習せしめられたにありまする明治三年に現今の校舎即ち津田玄蕃氏の舊邸に移轉し醫學院と改稱せられ同四年に蘭人を招聘して教師とせられました此の如く他藩に卒先して夙に外國人をも聘して此美舉を致されたるは勿論藩主

の賢明なりしに據るに違ひませぬが又當時醫業に従事せる人々の内に先見ありし有爲の人物ありしことを証し得るものと思えます斯くの如く着々進歩に傾きつゝある折柄明治五年廢藩置縣の改革は際し學校病院は經費の出路を失ひまして學校病院は將に死な垂んとせしも此有爲の有志者は一時私立病院の狀態として辛ふして之を維持致しました今日に於ては續々私立病院の設立せらるものもあるも當時未開の秋は際し漢醫の反對最も有勢なりし秋況んや外國人の教師に就きましても相當の所置をなさざる可からず當時の困難なる狀態は蓋し今人の迎も想像にも及はざることゝ察せられます然るに幸ひにして縣廳より保護を受ける事となり瀕死の難病も有力なる有志者の手に依て治癒し明治九年改めて縣立病院となり其の一部を教場として之を醫學所と稱し太田美濃里先生が其院長と所長とを兼務せられました之れ即ち病院と學校と分かるゝ始りでゐります明治十二年太田先生等の盡力より由て病院新築落成しました現在病院の建物の内其の最も大

なるもの二棟が即ち之れてゐります後漸次増築せられました之に由て規模漸く廣大となり醫學所は金澤醫學校と改稱せられ庶務亦繁劇となりし爲め太田先生は病院長田中信吾先生は學校長を任命せられました之れより校院漸く整備しましたが明治十四年太田院長は其の職を辭され田中校長は院長を兼ねらるゝことになりました明治十七年に至るまで學校の設備漸く整ひ遂に石川縣甲種醫學校となりましたが其年田中校院長職を辭され中濱東一郎君其の後を續き大に新式醫學教授の方針を究められました其翌十八年中濱氏獨逸國留學を拜命し不肖の私が校院長の職を執りましたが明治二十年本縣官民一致協同の力に由て高等中學校其醫學部を當金澤市に設けらるゝことになり縣立の醫學校は官立のものとなりました明治十八年の時は私は當時年尚ほ甚だ若く世事に經驗なく加ふるよ不肖の者てゐりますから縣廳の御勸めではありましたが三度迄校院長就職の事を謝絶致しましたが四度目に當時の縣知事岩村殿より強ひて勸められまして據なき事

情もありましたから約半年間の約束を以て就職することと致しましたが其後地方聯合醫學校を設くる風説起り之に續き高等中學の問題も出まして猥り校長の移動を許さぬ事情もありて私は餘儀なく繼續校院長の職に留らねばならぬことでありました而已ならず甚だ不本意でありましたが岩村縣知事殿の厚意を背くを得ず又事情もありて遂に醫學部長となり明治二十五年迄事務を執りました明治十八年より滿七年間許り事務を執り此間學校は大變動のありし時でありますから不肖の身も取り繁劇を感じましたなれども私は我が眞の目的たる學術研究を怠るを欲せずして生徒教授の如きは他の教官と同等の時間數を負擔致しましたが之れ不肖に取り多少無理な仕事を致しましたのでありますから此の永く事務を執りたる爲め私が今日尚ほ淺學である一原因は此時に歸因するならんと存じ今に遺憾として居ることゐります、

右に述べました通り既し明治元年に賢明なる舊藩主前田公は養生所を設け病院學校の端緒を開かれ又當時の有志

者は民度甚ぐ未開の秋は際し百難を排して學校病院を維持し竟に甲種醫學校の根據を造り以て今日の醫學專門學校あるに至り亦將來當市は醫科大學校設立の豫想を抱くを得る様になりました此の今の醫學校の玉子の發育状態は我々の決して忘るべきものでありませぬ然るに之の醫學校より現今の醫學校は繼續奉職し居るもの今日も於て私の外に最早殆んどないのであります夫故今私が此地を去るに際し尙學校病院沿革の大畧を述べて置かなければ此後何人が舊藩主前田公の恩澤と故人の功績とを永く公衆に傳へるであらうかと云ふ事は私が大に不安心に思ふ處であります私は實に之をなすの義務あるものと心得ます當初より此學校病院に功勞ありし人々は私も遺憾ながら一々記憶し居りませぬが哀い哉今や多くは既に不歸の人となつて居られます津田淳三君田中信吾君の如き即ち之れであります然し幸ひに太田美濃里先生は最も功勞ありし一人にして今年七十三才の御高齢であります尙豐饒として居られますから直に尙昔の事と伺ふことが

出來ますのは喜ばしきことであります我學校院の紀念たる太田君の益々健全にして百歳の壽を保れんことは吾人の共に希望する處であります、又人の功勞、長官たりしもの、功勞は後に傳へられますが部下の人の功績は埋れ易いのでありますが赴任致しまして以來は今日健存し居る、醫學校幹事たりし高桑弘宗君の功勞は大なりしものと考へます又今の第二中學校教官たる堤從清君は醫學校附屬藥學科に關して功勞ありし人と存じます

又學校病院其後の沿革に於きましては毎年出版になりまする學校一覽によりて何人も知るを得ますから私の贅言を要しませぬ爾來學校は漸々進歩しつつありまするが之れ蓋し時勢の然らしむる所であります私の如きて先輩諸君が大体築き上げたる建物内に住み込み僅かの雜作を致した位の事で不肖の者でありますから誠意誠心を以て努力致しましたなれど自ら考へても何一つ著明の功勞などはありますませぬ唯永く在職したりと申のみにて僥倖なる時に際しましたのでありますから先輩諸君の勞力に對

しては十分謝さねばなりませぬ満場の諸君よ私は唯不肖なからも赤心して勉強した事丈は可憐の者と御思召て下さい

私は若き間は學事に熱中すべきものと考へて居りますから明治二十五年には或る機會を利用して總て校院長の職務を辞しました、其の理由として願ひ出てたる事は單簡にこゝいふことでありました、當時の學校は今よりも一層不整備でありましたから私か校院長として斯々の事をなさねならぬ然し之れをなす又は事務繁劇となり自然學事の方を等閑に致さねはならぬ然し之れは自分生涯の爲め忍びざる處である故に校長のなすべき事を知りつゝなさぬのであつて之れ甚だ不忠であります即ち不肖の私で事務と學事とは共に全ふすることは出来ない其れ故今研究すべき若き間は事務を免せられたといふのでありました幸ひ許可を得まして其後は小林廣君續て高安右人君等校院長の職に就かれました私は其後は幸ひに多少學事に熱中することを得まして少しは進歩致した様で

ムりますが然し私は不肖ながらも何卒か學者と云ふ者の仲間入りをしたい學者なる者は學問なる世界の中に自分の領分を大陸でも小島でも兎も角自分の領分を發見享有せねはならぬ他人の發見せし處に借地住ひをすべきものでないと思ひますから私も今尙年の若き間まだく研究が致し度き考で新領地を發見し得るや否やは之れは一人の運にも據りまするが兎に角何れの處にても金澤でも大坂でも我希望を容れ研究の便を與へますれば私は其處に行き度き考へでありました、故に私は從來金澤に永住するといふ考は少しもありませんでした只此學校が漸々進み行きますると他に好地位が見當たらなかつた爲めに此所に斯く長く在職致しましたので先年獨逸留學中既に研究に最も適當なる東京醫科大學に入り度き考を起しましたから歸朝後は莫大の俸給を以て此の不肖の私を迎へんとした處もムりましたが私は之を顧みなかつたのでムります時恰も東京醫科大學教師スクリッパ先生の傭滿期に近きを聞き私は之れ千歳の一遇と考へ歸朝後直ちに其

の後任者として採用あらんことを依頼致し其の相談は當時大に有望であり漸々進行して一昨年の暮より昨年の春に渡り殆んど將に決定發表せんとする迄に至りましたが月に村雲花に風の譬の如く意ふに或る障礙の爲めに目的を達せませんでした今は其好機會を失しましたから之れより生涯東京の大學に入るの望はなき事と決心致しました此の村雲や風は何れも私個人と關係して居りませぬ様でありますから厚意なる満場諸君には私は之れを不名譽とも思はず事實を御話し申し上げたのであります却又之れは後の御話にも關係もあるからでムいます斯の如く私は東京行の望を失ひまして昨年春夏の間は我一生を如何にせん乎と迷ひの時でありました然し東京以外の大學には行くを得ない又行くを好まない事情がありまして然らば此學校又留まらん乎とも考へましたが此病院にて設備すべき事は縣廳及縣民の厚意に由りまして近年頗に整頓致しまして少くも金澤病院外科部の整備に至りまして私は他に譲らない程ならんと考へまして大に

謝する處でムりまずが之に反して學校の側よりなすべき設備に至りましては未だ甚だ不十分でムりまして文部省に於ても既に之れを知られ漸く完整を企圖して居らるゝ様に見へますが何時希望の一部なり全部を遂げ得るや其れは分りませぬ其の間に自分の研究に従事すべき年齢は過ぎ去りましよう研究するには第一の必要は参考書でありますが我外科部一部の書籍費は數十圓に過ぎず故に私は常に私費にて購ふて居りましたが勿論不十分のことでムります又私は研究上動物試験等を致し度く其の費用は僅か數百圓の事でありましようが何年前より請求し居る平殆んど覺へのなき程に毎年／＼請求しますれども之も望を達せませぬ、然らば人の勸告もあります事故に自ら校長となつて思ふ儘みなさんかと考へしても私の場合によりては不肖ながら院長等の職を受くる事もありましようが然し私は當分はまだ若き間は此職務を好みませぬので其の理由は既述の如くであります且今校長となれば勢ひ校長としては公平に先づ外科外の他の各

學科の不整備を整へなければならぬは必常でゐりまして之れが私に校長の職に就く時は私の本目的たる研究に最も不利益な点でゐり、好きな仕事を不利益と知りつゝ爲すことは出来ませぬ其の内に大坂との交渉は始まりました、大坂病院は患者多く病症の種類は多く之れ研究に第一必要な材料の豊なる得点あり加ふるに書籍費の如き外科部のみにても確かに四百圓を出します又試験費の如きは殆んど思ふ丈の費額を受けることを得ます且現校長は研究する事に最も重きを置いて居られます夫れ故私は近き將來と云はず殆んど直ちに我目的を達し得らるゝ事と思はれます又不肖の私でありますれども私に研究心あるを見て此淺學の私を學者として厚遇する様に思はれます、私の家計上に於ては大坂に行く方は寧ろ大に不利益と考へますが此厚遇の爲めに私が早く目的を達せらるゝと思ふが爲めに互に愛し愛されて二十年間在職せる此金澤を去る決心になりました此の決心を促すもの尙他に種々原因はゐりますが私は之を一々公衆に説明す

る必要を認めませぬし又言ふを好みませぬ之れは只世人の風評に在す考でゐります、私は此の二十年間在職中此の不肖なるに關せず幾多の好意を受けました此石川縣は不肖の希望を容れられて厚意を表して下されました、同僚諸君は私と一回の紛議なく常に厚情を賜りました、學生諸君も亦同斷で殊に學生諸君は私に對し熱心なる厚意を表されましたとは一再に止まりませぬ嘗て私獨逸留學の時は學生諸君は金牌と金鎖とを贈り且つ紀念として私の肖像を學校に寄贈され私が學位を受領致しました時は學生諸君は金屏風と三幅對の掛物を贈り呉れました之皆數百人の厚意の結晶でゐります私は不肖の者でゐりますから勿論表面上の私の履歴は汗顔の次第でござりまするが然れども此厚意の結晶たる學生の紀念は私の履歴に光榮を添へて呉れました私は我學生諸君の徳厚くして師弟の道を重んぜられることは一生忘れられない次第です斯の如く私は學校病院の内外を問はず各方面より厚意を受けて居りますから勿論一点の不平のある筈はありません

ん此の厚意の御蔭を以て不肖の私も大なる瑕瑾なく却て今日は此の如き光榮を賜はることでムりますから此段感佩して赤心諸君に謝する處でムります

尙一言致しまするが私等同僚相謀り金澤病院新築を願ひましたるに縣廳も縣會も其の未曾有の大事業なるに拘らず直ちに我々の希望を御採用になりしことは縣の爲め病院の爲め大に祝賀する處でムりまして私共も大に喜んで居りまするが此際私が當縣を去るは或は不徳義なり或は無責任なりと御認めになる御方が縣下になしとも申されません、其れはどうでも致し方がムりません然し私個人は私が此新築を發意せる其時既に已に私は前述の通り東京に行く考で居りましたので私は學校病院の爲め縣下の爲め新築の必要を認めて發起致しましたるのにて他意あるのではムりませぬ其故當時私は人の私を質すものありても私は自ら此の病院に長く留まると云ふことは一言も申して居りません勿論長く居らぬ考でありし時故に留まると言へよう筈のないのでムります此れは諸君に於ても

不惡御了察を願ひます

終りに臨んで私は滿場諸君の今日迄の熱心なる厚情を謝すると同時に諸君等と別るゝは實に忍びない次第でありますが前述の如き私の抱負故致し方なき儀と御察し下さい尙又當學校病院の益隆盛に赴かんこと及滿場諸君の健康万福を祈り併せて將來不相變御厚誼を賜はらんことを願ひ上げます、(終り)

次て各員悲痛の演説あり餘興として琵琶、講談、落語あり愁中多少の悶を遣りて惜別數時、時恰かも黄昏諸氏愛を割きて歸路に途く、

嗚呼犀東袂を別つ又何れの時にか訓陶の榮を得ん唯願くば先生生等微衷の在る所を諒し時に應し機に觸れ益々指導扶掖の勞を吝まれざらんことを、

附記す先生演説大要は誤謬なしとせず之れ全く小生の迂遠の罪先生及見ん人諒せよ、
(有壁壘)

○宮田學士を迎ふ

嘗て木村博士を失ひし手今や宮田學士を迎ふ一憂一喜人

生は萬事驚馬の諺我れを欺かず、先生年少く氣鋭嘗て東京醫科大學より外科部上席助手として秀俊の聞高かりしと今や博士の後を享く又先生の德譽なるなからんか先生願くは益々斯道の爲め盡瘁せられ指導扶掖の勞を吝なるなかれ、(藁)

○本會名譽會員の推薦

今回本會々則第三條第二項により左の三君を本會名譽會員に推薦したり

醫學博士 木村 孝藏君

醫學博士 鈴木文太郎君

醫學士 野田 忠廣君

右よつぎ三君より本會々長へ左の如く挨拶ありたり

拜啓 小生儀今般貴會々員御一同の御協議より因り貴會名譽會員より御推選を蒙り候趣非才敢て當らすと愚信致候得共不取敢謹て御請申上候 拜具

明治三十六年一月三十日

野田 忠 廣

十全會長高安右人殿

拜呈貴會益御隆盛之段奉拜賀候陳者今般小生を御會名譽會員より御推選被成下候趣き御通知被下不肖の身より取り實は過分の御取扱と存し恐縮の至りに奉存候得共會員御一同様より此名譽を御與へ被下候事と存候間御厚意より背き候も反而失禮とも存候に付謹而御受申上候此段全會員諸君へ御禮と共に御披露被下度奉存候先は御請迄得貴意度如此より御座候 敬具

大坂ニテ

明治三十六年一月三十一日

木村 孝藏

十全會々長高安右人殿

拜呈陳者此程十全會より丁重なる御推薦を被下恐縮の至りに御座候實は早速御返事仕る可き筈の處彼是と取紛れ居り遅延の段申譯無之候小生に於ては無上の名譽には候得共是迄寸効も無之身分にて如斯光榮なる位置を得るは如何に慚惶の至りより御座候乍然折角御推薦の榮を賜り候を今更御斷り申上は失禮と存右御請仕候な

へ可然御取計相成様願上り就ては何卒貴下より十全會
候 敬具

明治三十六年二月四日

鈴木文太郎

高安 右 人 殿

○金澤病院職制改正

此度金澤病院職制改正せられ各部長を醫長と改められ又
從來の各部を廢して科となし更に左の數科を増加分離さ
れたり

一 內科

一 神經科(増)

一 小兒科(増)

一 外科

一 皮膚及花柳病科(増)

一 耳鼻咽喉科(増)

一 眼科

一 婦人科

一 産科(分科)

右につき金澤病院診療所屬内規を左の如く定められたり

(一) 胸部内科

心臓、血管、氣管、肺臓、肋膜の諸病及當該臓器の傳染
病を診療す

(二) 腹部内科

食道、胃、腸、肝、脾、腎、腹膜の諸病及當該臓器の傳染
病を診療す

(三) 血液病科

脾臓及血液病を診療す

(四) 全身病科

物質代謝機病を診療す

(五) 神經科

腦、脊髓及神經系諸病并に當該傳染病を診療す

(六) 小兒科

十二歳未満の内科的小兒病を診療す

(七) 頭部外科

頭部及頸部を診療す

(八) 胸部外科

(九) 腹部外科

(十) 四肢外科

(十一) 脊柱及四肢外科

(十二) 泌尿生殖器外科

(十三) 皮膚及花柳病科

(十四) 耳鼻咽喉科

(十五) 眼科

(十六) 婦人科

(十七) 産科

○金澤病院各科醫長囑托

前項の如く金澤病院職制改定の結果として左の諸氏は醫長を囑托せられ頭書の各科診療を新たに委囑せられたり

眼科

高安 教授

婦人科及産科

小川 教授

血液病及胸部内科
神経科

大西 教授

脊柱四肢及泌尿生殖器外科
皮膚及花柳病科

下平 教授

全身病及病腹部内科
小兒科

佐々木教授

頭部胸部及腹部外科
耳鼻咽喉科

宮田 教授

○陸軍衛生部依託生徒の採用 通常會員醫學科第三年生

松山俊夫、小原徳太郎、佐藤潮、石橋四郎、佐野愛二、同
二年生正本美澄、山下振吾の七氏はいづれも一月二十二
日附を以て陸軍衛生部依託生徒を命ぜられたり

○新年の賀狀 左の諸君より本會へ新年の賀狀を寄せら
れたり謹て謝す

關口通太郎君 田代 保二君 橋本喜久三君

辻岡 律君 齋 薫君 吉川 砥直君

生沼 曹六君 喜多外太郎君 澤 賢吉君

平田 一若君 兒島 亮吉君 土田久三郎君

宮井 勇君 蓮村 外男君 渡 孚貞君

久保 武君 高松 多齊君 太田他計作君

松井梅次郎君 榎原 久君 河野 勇君

武田久米藏君 諸角 友平君 石田 五佐君

河村 宗作君 杉山 政長君 野嶽 利七君

大西 瀨治君 橘 左内君 高森万次郎君

原 清八君 井口 正察君 竹松 衛君

高松 岩吉君 田中 健次君 永井 環君

千葉 玄也君 毛利 靜一君 北川 健三君

輕部 修一君 藤井榮四郎君 竹下麗三郎君

牧 良一君 本田 三郎君 森田 齊次君

片岡 正君 森井喜三次郎君 丸山 六郎君

中島 正泰君 中西政太郎君 森川 修君

中野 才幸君 高岡 高勝君 金子太須計君

國分 金城君 太田 精一君 星野 正齊君

○入退會者

▲退會者

通常會員

全

服部 環
宮崎 善六

全

荒木 淑人

▲死亡者

校外特別會員

小栗熊次郎

* * * * *

通信

○北豐吉氏の通信

(十一月十七日ライブ)
(チツヒ發松田委員宛)

(前略)其後は甚た御不沙汰よ打過ぎ失禮仕り候貴殿又は
定めて御清祥の事と奉察候小生無事在學罷在候間乍他事
御放慮被下度候實は當地に來れば甚閑な事と察し居たる
よあべこべに甚た忙かしく加之生來の筆無性のためかく
は失禮仕候段平に御海容被下度候未だ歲前なれども此端
書御落手ノ頃は己に新年に相成べく候間目出度き春を御
迎へ成されん事を祈上候他の學友諸君には右の次第にて
一々賀狀を呈し兼ね候間十全會雜誌を籍りて御慶申上度
候間甚た御手数なから何卒宜しく御取斗被下度候(後略)

○金子教授書翰の一節 (一月四日ハルレ 府發石川教授宛)

當府解剖は丁度高等學校の本館(煉瓦)程なり教場は百人
 諸位なれ共一教場の聴講者多くも三十人を越へず少なき
 は五六人に過ぎず夫故講義及デモンストラチオンは思ひ
 のまゝ丁寧なり解剖室(實習室の意?)は凡ろ我校位のも
 の注射料はグリセリン三リートル、フォルモール三百瓦、
 水二リートル半右一體の量なり近來何地にも尤も行はる
 る法にてグリセリンが多ひ丈指失杯決して乾燥すること
 なく何年までも無限に貯へ得るなり試用を乞ふ(中略)標
 本は仲々澤山あるこれが身代だ僅々百名に足らざる生徒
 にプロフェツソル三人、ドセント三人、助手二人、プレ
 バラント一人、小使三人あり此小使の如きも講義用の標
 本位は何んの苦もなく造るなり何事も必要なるは人手な
 り我小使にも段々教へ込み度きものだ云々

* * *
 * * *
 * * *

會告

○寄贈及交換書目 (二月七日迄ニ領取ノ分)

成醫會月報	二〇二二、五、二八、二四九、五〇、	同	會
訂正版生理學講義	卷二、三	貳冊	
セーヘル文典		壹冊	
田口和美編 解剖攬要	卷三ノ上	壹冊	八田智証君
佐藤勤也編 新訂實用婦人科學後篇		壹冊	佐藤勤也君
ウエーニヒ 獨逸辭典		壹冊	
ハイゼー 他國辭典		壹冊	鈴本寛之助君
卯辰山開拓錄		壹冊	木村孝藏君
東京醫事新誌	二六、二七、二八、二九、三〇、 三八、三九、四〇、四一、	同	局
東京醫學會雜誌	其ノ三、三、三、四、 七、一〇、一二、	同	會
北海醫報	二ノ六七、	同	北辰病院研究會
大日本耳鼻咽喉科會々報	八ノ六、九ノ二、三、	同	會
醫事新聞	六、五、六、七、八、九、三〇	同	社

日本助產婦新報	五、八、九、六〇、	同發行所	大日本私立衛生會雜誌	二、四、五、六、	同會
中央醫學會雜誌	四、八、五〇、	同會	廣島衛生醫事月報	四、七、八、九、	同社
井上眼科同窓會々報	二〇、一、	同會	岡山醫學會雜誌	一、五、五、六、	同會
臺灣醫學會雜誌	三、四、五、	同會	日本眼科學會雜誌	六、一〇、二、三、七、一、	同會
產科婦人科學雜誌	四、一〇、二、三、五、一、	同會	獨逸語學雜誌	五、一〇、三、四、五、	同社
軍醫學會雜誌	一、三、三、	陸軍々醫學會	東北醫學會雜誌	二、六、	仙臺醫學專門學校同會
日本醫事週報	四〇、五、六、七、八、九、一〇、一、二、三、四、五、	同社	產婆學雜誌	三、六、七、八、	日本產婆學協會
藥石新報	四、五、六、七、八、九、五〇、一、二、三、	同社	藝備醫事	七、八、九、一〇、	藝備醫學會
醫海時報	四〇、一、二、三、四、五、六、七、八、九、五〇、一、	同社	校友會雜誌	二、九、	東京開成中學校同會
助產ノ榮	七、八、九、一〇、	緒方助產婦學會	順天堂醫事研究會雜誌	三、五、六、一〇、一、	同會
東洋青年新聞	一、	同社	學士會月報	一、七、八、九、	同會
植物學雜誌	一、六、一、八、九、九〇、	東京植物學會幹事	北辰會雜誌	三、	第四高等學校同會
北越醫會々報	一、三、二、	同會	醫科器械月報	七、八、	同社
國家醫學會雜誌	一、七、八、九、	同會	福井縣醫學會雜誌	四、八、九、	同會
醫談	七、八、	獎進醫會	皮膚科及泌尿器科雜誌	二、一〇、三、四、五、	日本皮膚學會
中央醫事新報	五、四、五、六、七、八、	同社	躬行會叢誌	六、	同會
藥學雜誌	二、四、九、五〇、一、	日本藥學會	研瑤會雜誌	五、一、	長崎醫學專門學校同會

神經學雜誌 一ノ五、

衛生談話 二、

治療新報 一〇、

好生館醫事研究會雜誌 九ノ六

日本消化機病學會雜誌 一ノ四

同窓會雜誌 九、

杏林之榮 一四ノ七、

東京教育時報 二八、

校友會雜誌 三、

校友會雜誌 七、

中央婦人科學雜誌 一ノ一、

靜岡縣醫學會々報 五、

日本神經學會

通俗衛生茶話會

同 社

同 會

同 會

愛知縣立醫學校同會

立 洋 醫 會

東京市教育會

千葉醫學專門學校同會

東京慈惠醫院醫學校同會

緒方婦人科學會

同 會

本誌第二十五號寄贈及交換書目欄中ノ正誤

誤

正

宇。出謙吉著ハ

平。出謙吉著

○會費領収

(明治三十六年二月四日迄)

金參圓	三ヶ年分	(自三十五年度至三十七年度)	丸山 六郎君
金參圓	三ヶ年分	(自三十四年度至三十六年度)	近郷 重孝君
金參圓	三ヶ年分	(自三十三年度至三十五年度)	堀 收次君
金壹圓	一ヶ年分	(三十四年度)	林 義輔君
金參圓	三ヶ年分	(自三十五年度至三十七年度)	片岡 正君
金參圓	三ヶ年分	(自三十四年度至三十七年度)	鷺山他三郎君
金壹圓	一ヶ年分	(三十四年度)	藤岡 勝治君
金參圓	五ヶ年分	(自三十五年度至三十九年度)	梶川 藏重君
金壹圓	一ヶ年分	(三十五年度)	高澤 甚作君
金壹圓	一ヶ年分	(三十五年度)	澤 賢吉君
小計金貳拾貳圓也			

本誌第二十五號會費領収ノ欄中ノ正誤

誤

正

山田。敏雄君ハ 山口。敏雄君

鎌田。勘之助君ノ金壹圓ハ 金參圓

富田。稔廣。君ハ 富田。稔賢。君

加納。景成君ノ金壹圓ハ 金參圓

高松。多齊君ノ三十五。年度ハ 三十四。年度

會員諸君ニ告グ

醫學博士 木村孝藏君

醫學博士 鈴木文太郎君

醫學士 野田忠廣君

今般右三君ヲ本會名譽會員ニ推

薦ス

明治三十六年一月二十七日

十全會

特別校外會員諸君ニ告グ

本會雜誌發行
の儀逐々遅延
に及び候處次
號より延滞無
く發行可致候
間會員諸君は
何事に關せず
續々玉稿御投
寄被下度此段
及御依頼候也

十全會雜誌部

十全會講話部大會

開會廣告

會場 金澤市廣坂通縣會議事堂

會日 來ル五月四日午前正八時開會

晝食懇話 全正午ヨリ一時迄

追テ中食入用フ方ハ四月卅日迄ニ申込、

食費拾五錢御持參ノコ

開會 全午後六時

演說時間 二十分乃至三十分

演說申込 四月廿日限り

追テ常會出席ニ不便ナル特別會員諸君ハ

此際奮テ御出席アラシメテ乞フ

三月八日

十全會講話部

特別會員諸君ニ告グ

來五月四日十全會講話部大會終了ノ後特別會員ノ懇親會相催度候間御賛成ノ諸君ハ來ル四月廿日迄ニ金澤病院内科醫局森島彦夫へ宛御一報被下度候

發 起 者

金澤

病院

婦人科產科醫局	眼科醫局	耳鼻咽喉科醫局	皮膚及花柳病科醫局	外科醫局	小兒科醫局	神經科醫局	内科醫局
---------	------	---------	-----------	------	-------	-------	------

* * * * *